



編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成14年7月15日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎082-229-0618 zenshoji@bronze.ocn.ne.jp

無常迅速 「気がついたら四十年」

禅昌寺守塔 横山 正賢



今年五月十一日私が禅昌寺に入山して四十年、
来年六月十九日で住職を拝命して満四十年を迎え
ます。あつという間の四十年でした。
仏教の眼目は七仏通誠の偈（お釈迦様に到る七代
の仏様の、仏教の根本義を偈文にしたもの）に、
諸悪莫作 諸の悪は作すことなかれ
衆善奉行 衆の善を奉行し
自淨其意 自ら其の意を淨うする
是れ諸仏の教である

とあり、宗祖道元禪師は
「仏道をならうというは、自己をならうなり。
自己をならうというは、自己をわするなり。
自己をわするというのは、万法に証せらるるなり。
万法に証せらるるというのは、
自己の身心、および他己の身心をして
脱落せしむるなり。」
と仏道修行の用心を示されています。
この仏教の眼目も道元禪師の御教えも、仏様の

道というのは、私たち凡夫と懸け離れた、身心の
他にあるものではなく、天地いっばいに生かされ
て、天地いっばいに還えつて仏となる、在りのま
まを素直に受けとめて行くことを論しておられま
す。

日々の生き方を修証義に、

「いわゆるの道理は日々の生命を等閑にせず、

私に費さざらんと行持するなり。

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、

何れの善巧方便ありてか

過ぎにし一日をふたたび還し得たる、

徒らに百才生けらんは恨むべき日月なり、

たとい百才の日月は声色の奴卑と馳走すとも、

其中一日の行持を行取せば

一生の百才を行取するのみに非ず、

百才の佗生をも度取すべきなり」

と示されてあります、

「いわゆるの道理は日々の生命を等閑にせず、

私に費さざらんと行持するなり」

これを私の生き方の拠り所として来しました。御教

えに少しでも添った生き方をしたいと願いなが

ら、無我夢中の四十年だったと申したいところ

ありますが、やはり我見我慢の日々であったこと

を懺悔せずにはおれません。

そろそろ次代への禅譲を考える齢になってこれ

までの生涯を振り返えつてみますと。

「我が生命をして運ばされている生命」

という自分を深く感じます。

「我が生命の営み」を自己の名聞利欲の自我を中



と日本」

副住職 横山 泰賢
(北アメリカ開教センター勤務)

7月初旬帰国した折りのことですが、広島の蒸し暑さに驚いておりました。周りの人に聞くと「まだまだ涼しいほうですよ!」との答えが返ってきます。感覚というのは恐ろしいもので、長年住み慣れた広島的气候を私の身体は忘れてしまったのでしょうか?

これは身体ばかりではなく、ものの考え方が以前の自分とは違って来ていると思うことがよくあります。最近では帰国子女受け入れ校が増え、その対応も充実してきているようですが、帰国子女の問題も一番の原因はそこにあると思います。しかし海外での暮らしが長くなり、特に布教活動などをしてしていると、日本人のものの考え方そのままでは受け入れてもらえないという事実もあります。渡米して最初の3年間は、

毎日の生活を通して自分が周りから否定されているような気がして、辛い思いをしました。今はその逆で、日本に帰ってきてうっかりアメリカと同じ調子で話をしていると、相手から否定的な印象を受けることがあります。時には言葉に出して「アメリカとは違いますからね!」とか「帰国されたらそうはいかないかもしれないですね!」と言われる方もいます。自分が認めてもらえないことや、受け入れてもらえないことは、大変寂しいことですが、自分の変化や適合性を周りが自然と教えてくれるのですから、誠に有難いことでもあります。

仏教では「諸行無常」「諸法無我」等と説くためか西洋においてニヒリズムと言われることがあります。これは誤った仏教の理解であると

心に営むときは、我執の「るつば」に墜ちて自分を見失うものだと知り。

「我が生命の営み」は如何に在るべきかと、道元禅師のお言葉

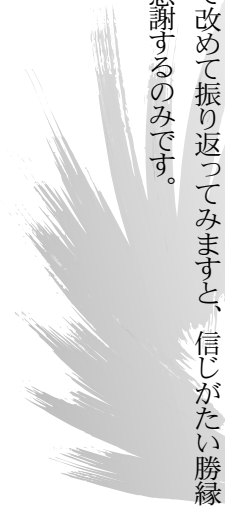
「心をもてはかることなかれ、ことばをもていふことなかれ、ただ我が身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにいたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、

ここをも、つひやさずして、生死をはなれて仏となる」

に添った生き方には限りなく生かされて行く自分を感じます。

幸いに檀信徒の皆様を始め有縁の方々との勝縁は、伽藍の移転復興、再移転、道場の建設、末寺の新寺建立等々今思いますと、私を始め、これらの事業に携わった者の知恵や努力といった、人間的計らい事ではない、正に仏天の御加護の賜という不思議な霊機のなしたわざとしか言いようがありません。

しかし伽藍が如何に立派であろうとも、そこに集う宗徒が少ないようでは、和尚の不徳というほかは無いでしょう。被爆前は二百戸余りの檀信徒だったそうですが、私が入山した当時約七十戸の檀信徒は、大凡六倍になり、檀信徒以外の坐禅会、講演会などに登録されている信者は約百名、檀信徒外の墓地利用者は約九百戸となりました。こうして改めて振り返ってみますと、信じがたい勝縁を感謝するのみです。





「西洋」

思います。「諸行無常」とは、常住不変のものは何一つなく、常に移りゆくということ。「諸法無我」とは、あるゆるものに実体がないということです。この世の真実を覚り、執着を離れ苦しみから解脱するために説かれているのです。

私は海外で長い間生活させていたいたお陰で、色々な角度から自分を分析しながら、諸行無常・諸法無我を身体と心で実践することを学びました。日本に帰国すれば、前述したとおり、また同じ事を実践させていただけるのですから、言い換えれば仏教を学ぶビッグチャンスを2回いただくことになります。

異国に行けばその国なりの生活をしなければならぬし、そうしているうちに考え方も変わっていきます。日本に帰国すれば、日本なりの生活をしなければならぬし、考え方も日本なりの生活になるでしょう。どこへ行ってもどのような生活様式になろうとも変らぬ仏法だけは見失うわけには参りませんが、それぞれの文化や習慣時代に適合するよう変化して当然であるようにも思います。日本仏教の伝統もそのように自然に築かれてきたのではないのでしょうか。

アメリカの人達は日本の伝統のお仕着せ、特に形式に対して大きな違和感を感じます。その為、法要や儀式を日本と同じように行おうとはしません。むしろアメリカに合ったように変容させる努力をします。お寺によっては、木魚の代りにオルガンにあわせて、英訳されたお経をゴスペル調で歌っているところもあります。国が代れば形も大きく変わるものです。だからとい

って彼ら彼女らの仏教の理解が間違っているとは思いませんが、将来的に変容していく恐れがあると言っている学者もおられます。

ヨーロッパの人達は伝統を重んじるが故に、法要や儀式も日本と全く同じように行おうと努力します。ヨーロッパのある曹洞宗僧侶いわく「日本の伝統として正しい形を受け入れておけば、ヨーロッパの文化と伝統に揉まれて数百年の後には、ヨーロッパの形が出来るだろう」。アメリカの人達とは全く違った姿勢であります。つまり自分たちの文化と伝統に対する信頼と自信があるということではないのでしょうか。

このような西洋における仏教の展開をかいま見ながら、日本のことも外から伺うことが出来ます。昨年帰国した折り、久しぶりにバスに乗ったら大人料金と小児料金の他に「6歳未満の幼児について、1名のみ無料、その他は小児料金」と書いてあるのに気がつき、日本も変わってきているなと感じました。言葉で説明しなければ解らない、行動に移せない人が増えているという事です。私が学生の頃は、そのようなことは書いてなかったような気がします。まるで私達が欧米で、合掌や礼拝の意味を説明しなければ理解してもらえないのと同じように、日本国内における共通の価値観というものが変わってきているのではないのでしょうか。

日本に仏教が伝わってから1500年、時代と共にそのアプローチは変化してきたはずですが、今の日本にも新しいアプローチが必要ではないかと感じる今日この頃です。

「悲しみはあした花咲く」
第1話

「他は是れ、吾に非ず。」

あなたの人生を決めるのは、あなた自身です。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

「春は、いろいろな意味で、人生の出発点。新入学や就職で、親元から巣立ってひとり暮らしを始める人がいます。経済不況で、就職浪人となった不運な方もいるでしょうし、人事異動や転勤で、新しい仲間や上司・先輩、部下・後輩を迎えた人もいます。これまでも違う社会に移れば、いやでも新たな人間関係が増える。それが日一日と増えることはあっても、減ることはないのです。私たちは未知の人々との出会いと期待に胸をふくらませます。しかし、決して楽しいことばかりではありません。陰湿なイジメ、誤解や嫉妬による軋轢は職場であれ、近所であれ、いっぱいあります。悩み、苦しんでストレスが鬱積すると、五月病“にとりつかれたりします。私たちひとりひとりに、一日二

四時間、一年三六五日という時間が与えられています。貧乏な人も、お金持ちも、美人もそうでない人も、みんな平等。そして、誰の上にもひとしく、晴れの日や雨の日が、風の日や嵐の日があります。それを私たちがどう受け止めてゆくかで、その時間や歳月を喜びで埋めてゆくことにも、逆に悲しみの涙や愚痴で埋めてゆくことにもなります。」

庫裏(住職の住まい)の茶室に仕切った囲炉裏で、湯が沸いた。一服のお茶でくつろいだあと、東井義雄先生の詩集を見せていただいた。太陽は夜の明けるのを待って昇るのではない
太陽が昇るから
夜が明けるのだ

仏前結婚の導師を頼まれると、俊董さんはこの詩を色紙に書いて、

新郎新婦に渡すことが多い。そして、こんな言葉を添えるのが常である。

「うまくいかなかった時、人はとかく他に責任を転嫁します。姑さんが悪かった、上司が悪かった。学校が社会が悪い。運が悪かったと。どんなに失敗の原因を他に転嫁してみても、問題は解決しません。いかなる結果を招こうと、積極的に自分の責任として背負ってゆく。この姿勢を忘れないでください。あなたの方の家族を、職場を、そして人生を築いてゆく主人公は、他の誰でもないあなた自身です。誰にも代わってはもらえません」

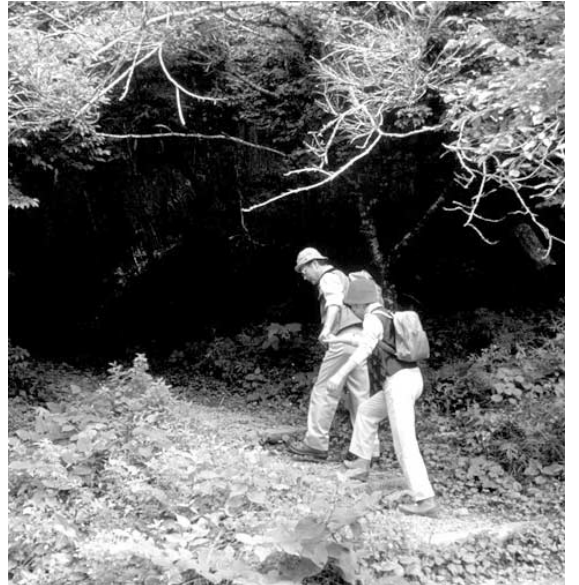
他は是れ 吾に非ず

ピシッと背筋を伸ばして、俊董さんは、つけ加える。

「日本曹洞宗の開祖・道元禅師が

中国に渡って禅を学ばれた時のことです。ある夏の昼下がりに、ひとりの老僧が、竹の杖で体を支えながら椎茸を干しておられました。強い陽光はようしゃなく照りつけ、庭に敷いた瓦は熱く焼けついていきます。汗が滝のように流れるのもかまわず、作業に打ち込んでおられる姿に感動しながらも、道元禅師は思わず、”何も真僧ご自身がなさらなくても、若い人とか下働きの人に命じてやらせられたらよろしいのに”と声をかけてしまいます。日本からはるばるやってきた若い修行僧の言葉に対して返ってきた老師の答えは”他は是れ、吾に非ず”の一言でした。他人まかせにやらせていたら、やった人の修行にはなっても、私の修行にはならない。私の修行は、私が額に汗してやらねばならない、という意味ですね。いまから約八〇〇年前のお言葉ですけども、私には、いまも新鮮そのものに聞こえます。」

いま愛知専門尼僧堂堂長。正法寺、無量寺住職をつとめる俊董さんに、ともに修行する尼僧たちは「老師さま」と呼びかける。老師とは、禅宗の敬称である。



俊董さんがこの無量寺に入ったのは、まだ数え年の五歳の春のことであった。

一九三三年、愛知県一宮市の旧家に生まれた俊董さんが、さまざまに縁に導かれて故郷をあとにする日、母は悲しくて家に居たたまれず、一日裏の畑に隠れて泣いていた。もう一度だけ、この手でわが子を抱きしめたい。と、その母は一宮から塩尻の無量寺まで、八時間も汽車に乗って訪ねて来たこともある。病弱で寝たきりの父と、老衰の祖母を看護しながら、家計の切り盛りもすべて一身に背負って働きとおした母。小柄で、鶴のように痩せていた母。そんな

母が三十年前に亡くなった。後には、俊董さんが一生かけても着つくせないほどの着物が残してあった。決して袖を通すことのない、金欄緞子の花嫁衣裳までが……。自分ひとりで蚕を飼い、糸をつむぎ、出家した愛娘の晴れ着を、そっと織り続けていたのである。涙をぬぐった俊董さんは、さらに厳しい坐禅を自らに課し、お釈迦さまの教えを、古今の名僧の言葉を見つめ直す。

若い尼僧や一般の人々に向けて、禅、茶道、生け花の心を次々に文章として書き綴った。初期の随筆集『美しき人に』は、五カ国語に翻訳され、宗教の違いを超えて世界中の人々に愛読されているほどだ。三年前、ハーバード大学などに招かれて行った講演も、アメリカの聴衆に深い感動を呼び起こし、近く英訳出版される。日本一の尼僧は、いま世界の“SHUND O AOYAMA”となった。

開け放った茶室の窓から残雪を戴く信州の山々が見える。そこに母の面影を探すように、遠くを見やりながら俊董は言う。「母は限りなく優しく、また厳しい人でもありました。そんな母親の生きる姿

勢に、面影に励まされて、私は修行を続けることができたのです。」

二二世紀の日本は 女性が変わる

「ここでお茶やお花のお稽古をしていますから、たくさんのお母さん方がみえます。」

つい先日、そのなかのひとりが、

ご自分の母親の思い出話をしてくださいました。そのお方のお母さんは、毎日ただの一度も子供たちを起こそうとしなかったし、お弁当を忘れても届けもしなかったそうです。『寝坊したため朝ご飯が食べられなかったり、遅刻して恥ずかしかったら、自分から起きてゆくようになる。お腹がすいて辛い思いをすれば、次から忘れないようになる。その方が大切。子供の人生、親は手伝うことも代わってやることもできないから』と言っています。その頃は「なんて私の母は冷たいのだろう」と、思ったそうです。そして、しみじみと、こんなふうに言うのです。「いまにして思えば、深い愛があればこそその厳しさだったんだな、と母親に感謝しております。自分が親になって初めてわかります。朝、起こしてし

まった方が気が楽ですよ。お腹を空かしたり、遅刻して辛い思いをしているだろうことを黙って見ているのは、本人より辛い。でも自分の人生をよい方に導いてゆくのも、駄目にするのも、自分しかないんだということをわかってほしいという、切なる母親の思いが今こそわかります。」と。

母親の力は、偉大です。その育て方ひとつで、子供はどのようにも変わります。二二世紀は、女性こそが混乱しきった日本を立て直す時代なのです。私たち女性はそのだけの力を持っているのに、物やお金、美貌という見せかけの幸せばかりを追って、本来の姿を見失っていたのです。日本の子供たちを、男性たちを、社会を変えていくために、まず私たちは本当の揺るぎない幸せとは何かを考え直しましょう。と同時に、女性はもっと美しくならなければなりません。お化粧のように洗えば落ちてしまう美しさではなく、本当の美しい人に……

※この第一話のみインタビュー形式になっております。

(本文は、青山俊重尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より
抜粋したものです。)

禅昌寺・護持会長になって……

佐伯区 原 一彦

酷暑の候、皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

去る、三月十六日の彼岸法要後の護持会総会で護持会長に選出されました。禅昌寺山門近くにお寺の沿革が記してある如く、約四百年前の元和年間より歴史と伝統と由緒あるお寺を護つて行くことは大変なことで、責任の重大さを痛感しています。微力ではございますが、禅昌寺発展の為に尽力する所存ですので、今後とも皆様のご指導、ご協力の程よろしくお願いいたします。

三月二十二～二十四日には、道元禪師七百五十回大遠忌参拝と輪島への旅行に同行させていただきました。方丈様が全国一万六千余の末寺の中から推薦されて、焼香師の大役をお勤めになられたことは私達にとりまして大変な名誉なこと、改めて禅昌寺の檀家であることに誇りを感じております。

永平寺法堂での法要は約六十～七十名の名僧・雲水さんに囲まれた、荘厳で厳肅な雰囲気の中で行われ、私は身の引き締まる思いがして、心が洗われ

新たな気持ちになりました。

”禅の友“に永平寺宮崎貫首が記しておられる如く、人は自分だけの身勝手な営みや欲望を満たすために生まれてきたのではなく「孝順は至道の法なり、孝を名づけて戒となす」のお示しどり、先祖への恩おくりが人の道の心―これが 慕古心 かと考えながら頭を垂れていました。

その夜、能登半島輪島のホテルで七十余名による会食・懇談をして護持会の皆様と改めて結束を強くし、禅昌寺発展の為に尽力する気持ちを新たにしました。楽しくも、思い出多い意義のある旅行であったと、今、思い出しております。

今後の、禅昌寺の益々の発展と皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げて、私の想いを記させていただきました。



愚々自叙伝

東区 平田 喜身夫

最近自叙伝という言葉を見たり聞いたりすることが時々ある。昨年の年賀に子供の為に自叙伝を書いていると知らせてくれた人があった。私には人に誇れる様なものはなく、むしろ反対な事ばかりで、自叙伝等書く勇氣は更々ないと思つていた。然し先日、和尚さんから、「何でもよいから書いてみないか」とお誘いがあり、折角の機会なので少しばかり書いてみようかという氣になったのだから、自分でも不思議でしやうがない。

十二才で何も解らないまま、父から云われるままに家を出て、当時吉島にあった県工の寄宿舎に入った。二年位たった時、学徒動員で観音町にあった三菱重工業、原爆一ヶ月前の七月初め、呉海軍施設部広支所に転属になり、そこでピ力にあつた。戦後家に帰り学校に復帰、十八才で日本発送電(株)に入社した。体格を見込まれての入社であつたが、二十才の時下痢と肩痛がひどくなり、結局肺浸潤と云うことで二年間休職した。当時混雑のひどかった芸備線で、片道三時間以上かけて向原からの通学通勤と、慣れない会社勤めの重圧に押し潰されたのだと思つてゐる。原爆直後に市内入りしているの



歳をとると云うことは
私の場合自分の愚かさに氣付かされ
教えられてきた歳月であつた。
今更悔んでもどうにもならないし、
まして未来の事等解るはずもない。
与えられたその時その場所を
有難く戴いて、
一生懸命生きるだけだと思つのである。

或はその後遺症が少しあつたのかも知れない。その後会社寮に入り二四才で結婚、三三才の時今度は肺結核で又二年間の休職、五九才癌で胃の全摘手術、その他小さな病氣は数知れず、慢性の下痢もあり、退職までの四二年間は半分は病氣との闘いであつたやうな氣がする。

このように病氣がちであつたから、万一の時にも家族が生活に困らない程度の財は残しておいてやりたいと云う思いが常にあつた。そのためにはと酒を慎み、ゴルフ、パチンコ、カラオケ、その他遊びには一切不義理を貫き、節約第一に努めてきた。その甲斐あつてか、二人の子供も立派に成長し、それぞれ伴侶を得て幸せに暮している。今娘夫婦と孫二人、計六人で生活

を共にしているのだが安心して総てを任せ、今日に至つてゐる。

蜜柑箱を食台代わりに、箸一膳から揃える生活から出発し、周りに不義理を重ねながらもよく頑張つて、どうにか家も建てることのできた。ここ迄これたのは百%は無理にしても、七・八十%位は自分の力と思つてきた。退職後心の余裕もでき振り返り見ると、自分の力等一つも無く総て肉親を始め衆恩のお陰であり、反対に養われてきたのが私であつたと今にして思うのである。今更どうにもならぬことだけれども、子供達が良くしてくれるにつけ、愚言愚行を繰り返し心配ばかりかけ、孝の思い出等一つとしてない両親に対し、全く相済まぬ事だつたと後悔もしている。

歳をとると云うことは一般的には、人間として成長完成して行くことだと思つけれども、私の場合退職後の十一年間は、自分の愚かさに氣付かされ、教えられてきた歳月であつた。今更悔んでもどうにもならないし、まして未来の事等解るはずもない。散策の途中、傘を差している牡丹に会つた。「雨傘の下で微笑む牡丹かな」『爛熟の牡丹に無稽夜の雨』何れの道になるかは牡丹の預かり知らぬところである。よく和尚さんの云われるように、与えられたその時その場所を有難く戴いて、一生懸命生きるだけだと思ふのである。私が此処にあるのは、愚かさになかなか氣付かぬ私を氣付く迄待ち続け、生かして下さつた神佛のお陰と、右を見ても左を見ても手を合はすことの多い毎日である。

合掌

「広島もやいの会」設立趣意書

核家族少子化時代が生み出した「孤独」、これは人間にとつて淋しいことであり。不安を募らせる人は少なくないでしょう。

「私の終焉は誰が見取ってくれるか」

「私が死んだら誰が供養してくれるか」「お墓を建てたとしても、子供がいないので祭祀してくれる人がいない」「一人娘が嫁いでしまい、お墓の祭祀を継承できない」「一人息子は外国に移り住んで祖先のお墓を祭祀することができない」こんな相談を持ちかけられることが多くなりました。

そんな悩みを持つ人たちが集まって「同じ境遇の家族の会」を作り、自分たちの「永遠の眠りの場所」として「もやいの碑」共同でお墓を作り、それを代々供養し祭祀を継承する母体として「広島もやいの会」を結成し、お互いが生きている間は旅行・ハイキング・登山など趣味を通じての交流会等、又日常生活に困った時など、気楽に人手を借りたりできる互助の会として、また会員の

終焉に当たっては、葬儀の全てと納骨後の祭祀に到るまで、故人となられたお方の遺志を「もやいの会」が尊重して祭祀してゆくという、会にしたいと考えております。

「広島もやいの会」設立発起人におきましては、本事業の運営に当たっては会員に公開され、会員による運営でなくてはならないと考えております。従つて会の結成に当たつて、本趣意書に賛同下さるお方にこそ参集願ひ、会則案・参加費・運営費・運営方法・事業等々をお諮りし、賛同者の決議をもつて結成に漕ぎ着けたく考えております。

結成に当たつては仏教（宗派を問わない）を拠り所として行くことに賛同されるお方で有れば何人も受け入れます。

設立発起人 禅昌寺住職 横山 正賢

代表世話人 斉藤 昭夫

右趣意書に賛同されるお方はお申し込み下さい。追つて設立準備会の日時をお知らせ致します。

◆道心・趣味の会◆

短歌

- 「家族を偲んで」
- 死に近き老いたる母は横たうる
- 息そくそくを蚕の眠り
- これの世に永らうとせず弟は
- 小さき点のみ宇宙に残す
- ありし日の夫の机上はそのままだに
- 原稿箋一冊年ねん黄ばむ

東区 矢野淑子

俳句

- 切り干しの大根乾かし 日の帰る
- 母の日や 母音大事に 歌うこえ

安佐北区 岡村竹畔

- 気休めに飲む置き葉はしり梅雨
- 廃坑の 間府に涼風 無尽蔵

東区 河野貞女

- 生家消えどくだみの白盛んなり
- 二回めのお多福風邪や 葵咲く

南区 田村圭峰

- 蟬時雨 精一杯に 今を生き

禅峰

◆行事案内◆（八月～十月）

毎週定例行事

八月中の坐禅会はお休みします。

- 暁天坐禅会 月曜日～金曜日

毎朝五時十分より五十五分まで

- 水曜坐禅会 午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半

話会 終了八時半

- 婦人坐禅会 毎週金曜日午後一時より坐禅・茶話会 終了三時

より坐禅・茶話会 終了三時

毎月定例行事

- 御詠歌の会

第二金曜日 午前十時より、

第四金曜日 午前九時より昼まで

- 日曜坐禅会

第一日曜日 午前九時より坐禅・茶話会 終了十一時

話会 終了十一時

毎年定例行事

- 孟蘭盆会法要

八月六日 午前十時半より法要・法話・会食 午後一時解散

恒例行事

- 登山の会 九月七日土曜日日帰り

行き先 石槌山（希望者電話乞う）

- 青山俊董尼老師講演会

九月三十日午前十時半より

- 月見演奏会「Tsuki-mi-in 寺」

十月十九日土曜日午後六時半より

演奏者 フルード 大代啓二先生

ハープ 井上久美子先生

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でもけっこうですお寄せ下さい。次号原稿締切は九月末日にお願いします。